



## えだまめ

### 適用拡大したネマキック 連作ハウスで効果を確信



静岡県静岡市 **滝戸 裕さん**〈えだまめ〉

2018年

JAしみず管内の滝戸裕さん(取材当時51)は、えだまめ栽培歴30年のベテラン。2017年はJAしみずフジエス枝豆委員会の委員長も務めた。フジエス枝豆は全国でも珍しいハウスで周年栽培されるえだまめで、清水区の三保・駒越地区の特産品だ。露地ものと違い見た目の美しさが特徴で、高級料亭でも使われる。滝戸さんは約50アールのハウスで年3~4作する。冬場に一部のハウスでハウレンソウをつくるが、基本はえだまめの連作。それだけに連作障害克服は最大の課題だ。

#### ■D-D剤で土壤消毒 3、4作目にネマキック粒剤で対策

「今、一番困っているのが線虫だ」と滝戸さん。滝戸さんの作付け体系は、7~8月にD-D剤で土壤消毒、9~10月に1作目の定植から収穫、12~1月に2作目、3~4月に3作目、5月末~6月に4作目となる。土壤消毒後は安定していた作柄も、3作目、4作目あたりになると線虫が多く出る場所では、収量がガクッと落ちる。「この地区はダイズシストセンチュウが多い。生育不良の株は抜くと根に丸い卵がついていて、その場所は坪枯れのようになる」という。2017年までは他の線虫剤で対応していたが、感覚としてはイマイチであった。その対策にと、**2018年2月にえだまめで、は種前防除にも適用拡大になった「ネマキック粒剤」を使い始めた。真っ先に感じたのは、収穫時になってもえだまめの高さが均一にそろったこと。生育不良が出ていない証拠だ。「いい感じになった」と滝戸さんは顔をほころばす。**

#### ■高品質な生産目指す

JAしみずの望月広孝次長は、「滝戸さんのほかにも、周年栽培のえだまめ生産者がネマキック粒剤を使い始めている」と話す。JAとしても線虫対策は課題だ。ハウレンソウとの輪作もそのひとつだが、相場と労力の問題もある。有効な剤の登場は望ましい。

